

『観無量寿経』における「観」の語

横 田 善 教

『観無量寿経』は「観」の語を冠する『観仏三昧海経』『観弥勒菩薩上生兜率天経』『観普賢菩薩行法経』『観藥王藥上二菩薩経』『観虚空藏菩薩経』と並ぶ六観経のひとつである。これらは五世紀頃、中国あるいは西域などにおいて著されたものではないかという説が有力視されているが、この六観経にはいくつかの共通点が存在する。たとえばインド撰述とは考えにくい訳語が用いられていたり、訳出年代が比較的短期間に集中していること。さらに思想面から見ると、称名等による滅罪思想が説かれ、また『観虚空藏菩薩経』以外には、多少重視度の違いこそあれ白毫に触れている。体裁的にも、「作此観者名爲正観、若他観者名爲邪観」（『観無量寿経』）のような正観と邪観を分ける定形句も、いずれの経にも見られる。

しかしながら、六つの経はただその観じる対象が異なってい

るというものではない。その経の成立に影響を与えた元の經典の性格によるところの差異も大きい。たとえば『観無量寿経』は『無量寿経』を、『観普賢菩薩行法経』は『妙法蓮華経』を、『観弥勒菩薩上生兜率天経』は『弥勒下生経』を意識して著されたものであることは確かである。また、『観藥王藥上二菩薩経』や『観虚空藏菩薩経』は、三十五仏名や五十三仏名などにも重点を置く。さらに他の経が一卷であるのに対し、『観仏三昧海経』だけは十巻あり、訳出もやや早くガンダーラ地方と深いつながりがあり、他の五経に影響を与えたものではないかと考えられている。このように、単に六観経と言っても、それぞれ個性を持ったもので、相互にどのような影響を及ぼし合いながら成立してきたのか興味深い。¹⁾

いずれにしてもこれら六観経は、「観」のもとに範疇をなす

もので、この語を除いてこれらの経を語ることとはできない。「観」によって功德を得、「観」じることによって見ることが難しい仏や菩薩の正依二報を目のあたりにしていく。本来、仏の姿は具体的な像として表されることはなく、仏足石などによってその一端が示されていたに過ぎず、そこから仏の姿を想像豊かにふくらました。それが年代が経つにつれ、次第に瑞相を具えた具体的なイメージとなり、ウィジュアルな仏像として表現されていった。想像豊かに仏を見ることができなくなった衆生のために、それら瑞相や仏像を通して、観仏は体系化されたものに進化していったのである。このような流れの中に、六観経があるといえよう。

ところが、この「観」の語は、しばしば他のいくつかの語と明確な区分を持たずに使用されることが多々ある。とくに漢字の微妙な使い分けがなされていない日本では、この問題を一層やっかいなものにしている。「観・見」などはいずれも「みる」であり、「念・想・憶・思」などもすべて「おもう」と訓読する。しかも、これらの語が、六観経内では混用されているような場合が多いので、訳す場合も細心の注意が必要になる。眼的作用の「みる」と心的作用の「おもう」は別のものであるが、「夢にみる」などみることが心の中の場合、「みる」と「おもう」は別作用ではなく、同じ心的なものとなるからである。

ちなみに六観経中によく使われる「みる」と訓読される漢字に「観・見」があるが、「観」は近くから物をながめる意味が強く、「見」はあらわれる、あるいはあらわれているものをみるという意味のものである。「観」は意識的に対象に注意をはらっているのに対し、「見」はそこに現前しているものを主観的に捉えている行動判断と解することができる。対象に近づいて注意すれば、今まで見えなかったものが見えるようになる。これが、観相における「観」と「見」であろう。

このように観相では、「観」が「見」に先立つように、「おもう」は「観」や「見」に先立つ。「おもう」ことは、対象に対する信の表明でもある。信の表明なくして客観的に対象を把握することは容易なことではない。心をよせ「おもう」からこそ「みる」のである。「おもう」と「みる」は、相互作用の中で深められていくものであろう。なお、この「おもう」と訳すことができる語の中、「念」は心にとどめ思う面が、「想」は心中に思いみる面が、「憶」はおぼえるという面がそれぞれ強い。

以上、「観」の語をめぐる諸語の概要を見てきたが、六観経中では具体的にどのように取り扱っているのであろうか。これらを検討することにより、『観無量寿経』の特色を明らかにしていきたい。

『觀虛空藏菩薩經』 一卷

『觀虛空藏菩薩經』はもともと短い經典（大正藏一三・六七七中・一行目〜六七八上・三行目）であったが、そこに記される三十五仏名などを列記した部分が附加され現行のものとなった。ここでは附加された部分は除いて検討する。

この經中には、「觀世音」という固有名詞を除くと、「觀」の語は二箇所しか見られない。

①如^二此惡事^一若欲^レ治。當^三云何觀^二虛空藏菩薩^一。設得^レ見者云何共住^二布薩僧事^一。

②佛告^二優波離^一。汝持^下是觀^二虛空藏^一法^上。爲^下未來世無^二慚愧^一衆生多犯^レ惡者^上廣分別說。

①は長老優波離が釈尊に対し、先に功德經に説かれている一切の惡や不善業を除くとされる虚空藏菩薩を觀じる方法について質問したもので、この經の主題の提示といえよう。また②は、①の質問を受けてその行法を明示し、最後にこの法が未來世の惡しき衆生のために説かれることを願ったものである。いずれも、觀相の行法の全体を指す場合に使用されているものである。それでは①から②に至る具体的な觀法の内容を表す時には、どのような語句を用いているのであろうか。治罪のためにはまず慚愧し、次いで一日乃至七日間十方仏を礼し、三十五仏名及

び大悲虚空藏菩薩の名を称える。そして、次のような「想」を起すべきだとする。

大悲菩薩。愍^二念我^一故爲^レ我現^レ身。爾時當^レ起^二是想^一。是虚空藏菩薩頂上有^二如意珠^一。其如意珠作^二紫金色^一。若見^二如意珠^一即見^二天冠^一。此天冠中。有^二三十五佛像現^一。如意珠中十方佛像現。虚空藏菩薩身長二十由旬。……（中略）……若此菩薩憐^二愍衆生^一故。作^二比丘像及一切色像^一。虚空藏菩薩の天冠を見るとそこに三十五仏の像が現れ、如意珠を見ると中に十方の仏の像が現れるという。「像」が「想」のことによって現れるが、これらは虚空藏菩薩が衆生をあわれむからこそであるという。これに続けて除罪の方法が説かれるが、その中で、

夢見^二虚空藏菩薩^一。告言^二毘尼薩^一。毘尼薩。某甲比丘。某甲優婆塞。更令^二懺悔^一。一日乃至七七^日。

とある。虚空藏菩薩に夢中で「見」えるというが、ここでの「見」は「あらわれた」の意味が強い。また、②の一文に続けて、

說^二是語^一時。時虚空藏菩薩。結加趺坐放^二金色光^一。如意珠中見^二三十五佛^一已。

と見仏について述べる。これらは、②の「觀虚空藏法」の結果によるものであるから、「觀」によって「見」が成されたもの

といえよう。

この経は観仏經典ではあるが、仏の観相についてはあまり触れない。「観虚空藏法」の内容の中心は、「今於此經」説三大悲虚空藏能救諸苦^①。及説呪以除罪咎^②。とあるように、懺悔や称名による除罪と言えよう。したがって、「観」に関連する語句の使用もけつして多いとは言えない。その少ない用例の中での使用方法をまとめるならば、「観」は行法全体を指す場合に使用され、「見」は結果としてあらわれたもの、あるいはあらわれたものを見る場合に用いる。さらに「想」は像を思い浮かべていくことを前提とした行為であることが窺われる。

『観弥勒菩薩上生兜率天経』 一卷

『観弥勒菩薩上生兜率天経』においても、「観」の語はさほど多く使用されない。まず、経の中ほどに、

佛告「優波離」。若有「比丘及一切大衆」。不厭「生死」樂「生」天者。愛「敬無上菩提心」者。欲「爲」彌勒「作」中弟子上者。當「作」是觀^①。作「是觀」者應「持」五戒八齋具足戒^②。身心精進不「求斷」結修「十善法」^③。一一思惟兜率陀天上上妙快樂^④。作「是觀」者名爲「正觀」^⑤。若他觀者名爲「邪觀」^⑥。

とある。これは、兜率陀天の様子等について詳説された後に、

この天に生まれたい者がどのようにすべきなのかを説いたものである。ここでの「是觀」「正觀」は、この兜率陀天を觀じることであるが、この兜率陀天の様子の説明中には、「観」や「見」「念」などの語は見出せない。この兜率陀天については説き尽くすことができず、

若我住「世一小劫中廣説一生補處菩薩報應及十善果者」^⑦。不「能」窮盡^⑧。今爲「汝等」畧而解説^⑨。

と述べられているように、ここでの解説は簡潔にまとめたものである。しかし、簡潔にまとめたから「観」等の語が省略されたとは考えにくい。もともとこの兜率陀天の説明は、優波離が世尊に、凡夫の阿逸多（弥勒）が次に仏になると説かれたことに對する質問から説かれたものである。つまり、最初から觀法として説かれたのではなく、説かれたことに付随して、この弥勒菩薩の弟子になる方法が觀法の形で付け加えられた構成になっている。したがって、「観」等の語が見出せないのは、最初から觀法を説くという形で説かれていないからであろう。いずれにしても、ここでの「観」は、兜率陀天を觀じるという行法全体を指している。しかもその觀じる内容は、「一一思惟兜率陀天上上妙快樂」とあったように、「思惟」という方法が中心を占めるものと考えられる。

続いて後半部では、弥勒菩薩の瑞相などをまとめて説き、さ

らに弥勒菩薩の称名や聞名による兜率陀天への往生を詳説する。
この部分の最後にも、

汝等及未來世修福持戒。皆當往三生彌勒菩薩前爲彌勒菩薩之所攝受^甲。佛告優波離。作是觀一者名爲正觀^一。若他觀者名爲邪觀^一。

と觀の正邪について述べる。もちろん、これらは行法全体を指しているのであるが、これと同様の「觀」が文中に見られる。

若有下欲生兜率陀天一者上。當作是觀一繫念思惟。念兜率陀天持佛禁戒。一日至三七日。思念十善行十善道^一。以^二此功德廻向願生彌勒前^一者。當作是觀^一。作是觀一者。若見一天人見一蓮花^一。

ここでの「是觀」も、行法全体を指す。一方、具体的な觀の対象をもつ場合は一ヶ所しか見当たらない。

諦觀^二眉間白毫相光^一。即得^三超越九十億劫生死之罪^一。

眉間の白毫を重視している姿勢が窺われるこの一文にのみ、明らかな対象を有している「觀」が見られる。しかし、これは兜率陀天に往生した時に修されるもので、現在の觀法とは言えない。弥勒菩薩の身体については、後半の最初に少し述べられるが、ここでも前半の兜率陀天の説明と同様に「觀」などの語は見出せない。

さて、眉間の白毫は、

『觀無量壽經』における「觀」の語

未來世中諸衆生等。聞是菩薩大悲名稱^一。造立形像^二香花衣服繪蓋幢幡禮拜繫念^一。此人命欲終時。彌勒菩薩放眉間白毫大人相光^一。與諸天子雨曼陀羅花^一。來迎此人^一。此人須臾即得往生^一。值遇彌勒頭面禮敬^一。

と述べられるように、來迎や往生とも深い関係にあるが、この聞名による往生の文の中で、「造立形像香花衣服繪蓋幢幡禮拜繫念」と述べられている。菩薩像を造立し繫念することが説かれるが、この像に対する繫念は、別の個所でも以下のように述べられる。

若有下精勤修諸功德威儀不缺掃塔塗地。以衆名香妙花一供養行衆三昧深入正受讀誦經典上。如是等人應當至心^一。雖不斷結如得六通^一。應下當繫念念佛形像^一。稱彌勒名上。如是等輩若一念頃受八戒齋^一。修諸淨業發弘誓願^一。命終之後譬如壯士屈伸臂一頃。即得往生兜率陀天^一。

兜率陀天への往生は、この像への繫念が大きな要因になっていると考えられる。そして、これらが「是觀」として捉えられているように、兜率陀天や弥勒菩薩を觀じる方法の一部として像への繫念があると言えよう。

なお、このような方法によって往生し弥勒菩薩に見えて法を聞き、未來世に一切諸仏にあえるというが、これらの場合、い

ずれも「値遇」あるいは「値」の語が使われる。この経は、観
仏（菩薩）による見仏に重点をおくのではなく、兜率陀天や弥
勒菩薩を観じることがステープとした往生による仏菩薩への値
遇が主となっている。したがって、「観」の語はもちろん、
「見」の語も「如レ此行人見二仏光明一即得二授記一」などの使用
例がほんの数箇所に見られるだけであるのも、このようなこの
経の性格によるものであろう。そして、その行法の具体的方法
に仏像を通じた繋念がある。この繋念は、「若有欲生兜率陀天
者。當作是觀繋念思惟。念兜率陀天」とあつたように、この観
の、つまりは往生の基礎となっている行為であることが分かる。

『観藥王藥上二菩薩經』 一卷

この『観藥王藥上二菩薩經』は、『観無量寿經』と同じ量良
耶舍の訳とされている。この経は前述の二経とは違い、「念」
や「見」「想」など「観」にまつわる語が多く用いられている。
その「観」の語自体も使用される回数も多い。この経は第二観
までしかないが、その第二観以降を見ると、

- ・ 佛滅度後若有二四衆一。云何觀二藥上菩薩清淨色身一。若
欲レ觀者當レ修二七法一。⁽¹⁶⁾
- ・ 若有下禮拜繋念觀二我身相一者上。願此衆生消二除三障一。⁽¹⁷⁾

- ・ 若觀二此二菩薩身相一者。於二現在世一必得レ見二藥王藥上二。⁽¹⁸⁾
 - ・ 此法之要名レ滅二諸罪障一。亦名三懺二悔惡業神呪一。亦名下
治二煩惱病二甘露妙藥上。亦名レ觀二藥王藥上清淨色身一。⁽¹⁹⁾
- と説かれている。ここに見られる「観」の語は、いずれも観相
全体を指すものである。さらに、

- ・ 佛滅度後若有下四衆。能如レ是觀二藥王菩薩一者。能持二藥
王菩薩名一者上。除二却八十萬劫生死之罪一。若能稱二是藥
王菩薩名字一。一心禮拜不レ遇二禍對一。終不二横死一。若
有二衆生於佛滅後一。能如レ是觀者是名二正觀一。若異觀者
名爲二邪觀一。⁽²⁰⁾
- ・ 若有下四衆聞二是藥上菩薩名一者。持二是藥上菩薩名一者。
稱二是藥上菩薩名一者。觀二是藥上菩薩身一者上。是藥上菩
薩放二身光明二攝二受彼人一。⁽²¹⁾
- ・ 若有下行者稱二是藥王藥上二菩薩名一者上。若有下念二二菩
薩一者上。若有下持二二菩薩名一者上。若有下觀二二菩薩
身一者上。若誦二二菩薩所說陀羅尼神呪一者。捨レ身來世
得二淨六根一。⁽²²⁾
- ・ 若有下衆生聞二我名一者。禮二拜我一者。觀二我身相一者上。
當レ令下此等皆服二甚深妙陀羅尼一無量閼二法樂一。⁽²³⁾
- ・ 若有下衆生禮二拜我一者稱二我名一者觀二我身相一者上。當レ
令二此等得レ服二上妙不死解脫甘露上藥一。⁽²⁴⁾

など、称名や聞名、礼拝などの行法と並列して観相が述べられている場合も同様のものと考えられる。ここでは、「観」と「念」が区別されている。しかも、これらの対象が薬王菩薩や薬上菩薩の「身」「身相」「色身」など、両菩薩の身体であることを明記している。これは、第二観の主題が、

第二観者心漸廣大。得_レ見_二藥王菩薩具足身相_一。⁽²⁵⁾

とあるように、菩薩の身相に見えるためである。しかし、この経が説かれたのは、寶積が釈尊に、

若善男子善女人。欲_レ斷_二罪障業_一者。當_三云何觀_二藥王藥上身相光明_一。⁽²⁶⁾

と問うたのがきっかけであつたことから考えると、けつして第二観だけのことは言えない。第一観は聞名や授記の功德の相についてであり、菩薩の身相については言及しないが、根底には菩薩の身相を見ることがあると考えられる。つまり、「観」と菩薩の身相は、切り離せない面を有している。

それでは、その第一観での「観」はどうかというと、

佛告_二大衆_一。佛滅度後若有_二衆生_一。繫念思惟觀_二藥王菩薩_一者。當_レ作_二五想_一。一者繫念數息想。二者安定心想。

三者不出息想。四者念實相想。五者安住三昧想。佛告_二彌勒_一。若善男子及善女人。修_二此五想_一者。於_二一念中_一即便得_レ見_二藥王菩薩_一。⁽²⁷⁾

とある。ここでの「観」も観法全体を指すが、注意しなければならぬのが、薬王菩薩を観じる手段として五想を説くことである。観法の内容として想名を付すのは『觀無量壽經』が有名であるが、対象や形態こそ異なるが、想名を付けるというのは両者に通じる面があると言えよう。但し、その想の内容が詳説されていないので断言できないが、想名から見る限り、心のあり方を説いたものと考えられ、「想」が「観」と同義的なものとしては扱われていない。しかし、この五想は観法の具体的な内容であり、これによって薬王菩薩にみえることができるのであるから、「観」と「想」は密接な関係にある。したがって、初観の最後に、

此想成時_{是名_三初觀_二藥王菩薩功德相貌_一}。⁽²⁸⁾

とあるように「想」を成すことが「観」であるとする。

なお、この初観のなかで具体的な対象を持った「観」の語がある。

是藥王菩薩其兩脩臂如_二百寶色_一。手十指端雨_二諸七寶_一。

若有_二衆生_一觀_二此菩薩十指端_一者。四百四病自然除滅。⁽²⁹⁾

薬王菩薩の指の瑞相を観じることにより、四百四病が癒えるとする。この経では、数少ないケースである。

一方、第二観の中では、

即應_二入_レ塔觀_レ像禮拜_一。於_二像前_一得_二觀佛三昧海_一。及見_二

無量諸菩薩衆^一。唯見^二藥王菩薩^一爲^二其說法^一。⁽³⁰⁾

とあり、仏像を観じることが説かれる。ここでの「観」も具体的な相あるいは想に言及しないが、明らかに対象が設定されている。

さて、この観法の修するにあたって、「繫念思惟觀藥王菩薩」「禮拜繫念觀我身相」とあったが、観と繫念がこの経でも関係したものとして捉えることができる。

然後繫念念^二藥王藥上^一菩薩清淨色身^一。⁽³¹⁾

と述べられ、あるいは、

覺已憶持終不^二忘失^一。繫念三昧即於^二定中^一。得^レ見^二藥上菩薩淨妙色身^一。⁽³²⁾

と説かれている。観法や見仏の背景に繫念があるといえよう。

なお、「見」の語は、引用文中にもしばしば見られたが、いずれも観あるいは現出によつて見られるものという一般的な使われ方といえる。

『觀普賢菩薩行法經』 一卷

法華三部經の結經とされる『觀普賢菩薩行法經』は、他の五つの観經に比べて、観心や実相觀の濃い經典である。たとえば、汝今應^三當觀^二大乘因^一。大乘因者諸法實相⁽³³⁾。

とあり、また、

觀^レ心無^レ心。從^二顛倒想^一起⁽³⁴⁾。

と述べ、さらに、

如^レ是懺悔觀^レ心無^レ心。法不^レ住^二法中^一。⁽³⁵⁾

と説く。他にも「觀法空無相」や「觀法如實際」と述べられているが、これらは対象を持っているものの、観仏（菩薩）を意図したものではない。それでは観仏を意図した場合はどうであろうか。

・當^レ學^二是觀^一。此觀功德除^レ所^二障礙^一。見^二上妙色^一。⁽³⁶⁾

・是名^三始觀^二普賢菩薩最初境界^一。⁽³⁷⁾

・汝今持^下是懺悔六根^一觀^二普賢菩薩^一法上⁽³⁸⁾。

・若有^二衆生^一。欲^レ觀^二普賢菩薩^一者。當^レ作^二是觀^一。作^二是觀^一者名^二正觀^一。若他觀者是名^二邪觀^一。⁽³⁹⁾

・如^レ是應^三當觀^二十方佛^一。⁽⁴⁰⁾

これらは「観」が行法の全体を指す場合のものである。また、

唯願觀^レ我聽^二我所說^一。⁽⁴¹⁾

とあるのは、この一文以下に修行者が仏に煩惱に汚れた我が身を觀じたまえりという懺悔の一部であつて、観仏ではない。

さらに、別の個所では、

汝今諦觀^二東方諸佛^一。說^二是語^一時。行者即見^二東方一切無量世界^一。⁽⁴²⁾

と説き、続けてその世界について詳説し、宝樹や宝座などを観
じることを説き、それにより諸仏の見仏が成就される。この場
合も「観」は行法全体を指示し、観の内容の具体的な対象につ
いては、「見」の語を用いている。

また、「想」については、

不_レ斷_二結使_一不_レ住_二使海_一。觀_レ心無_レ心。從_二顛倒想_一起。
如_レ此想心。從_二妄想_一起。……（中略）……我心自空。罪
福無_レ主。一切法如_レ是。無_レ住無_レ壞。如_レ是懺悔。觀_レ心
無_レ心。法不_レ住_二法中_一。諸法解脫滅諦寂靜。如_レ是想者
名_二大懺悔_一。名_二莊嚴懺悔_一。名_二無罪相懺悔_一。名_二破壞
心識_一。⁽⁴³⁾

とある。この中で注目したいのは、「如是想者」の「想」であ
る。これは、実相観を主とした懺悔法を指して「是想」と呼ぶ。
このような行法自体を「想」で示すのは、「観」の場合に通じ
る。これと同じような例が「念」にもある。

或有_レ説言。汝當_レ念_レ佛。或有_レ説言。汝當_レ念_レ法。或
有_レ説言。汝當_レ念_レ僧。或有_レ説言。汝當_レ念_レ戒。或有_レ
説言。汝當_レ念_レ施。或有_レ説言。汝當_レ念_レ天。如_レ此六法。
是菩提心。生_二菩薩_一法。汝今應_二當於諸佛前發_二露先罪_一。
……（中略）……五體投地。正念_二大乘_一。心不_二忘捨_一。
是名下懺_二悔眼根罪_一法上。⁽⁴⁴⁾

と六念から説きはじめ、眼根の懺悔法を明かし大乘を思念せよ
という。この懺悔法の最後に、

作_二是念_一者_二是爲_二正念_一。若他念者名爲_二邪念_一。是名_二眼
根初境界相_一。⁽⁴⁵⁾

と述べ、念の正邪を示す。「観」ではなく、「念」によって懺悔
法を説き明かす。

この経は普賢菩薩観と大乘の思念受持を通した懺悔滅罪を説
くが、その行法は、観相だけではなく想や念をもちいて体系付
けている。ちなみに、「正念思惟一實境界」と言い、「若欲懺悔
者 端坐念實相 衆罪如霜露 慧日能消除」とあるように、
「観」に置換できるような「念」の用い方により、両者が同じ
ような内容のものと推し測ることができ、明確に区分をするこ
とは難しい。

『観仏三昧海經』十卷

六観經中、唯一複數卷を有するこの経は、観仏を詳しく説く。
したがって、「観」の語をはじめ「観」に関連した諸語も頻出
する。それらすべてを取り上げることとはできないが、ここでは
それぞれの語の傾向について概観しておきたい。
まず、「観」についてであるが、

是名^二如來眞實髮相^一。若有^二比丘及比丘尼。諸優婆塞優婆夷等^一。欲^レ觀^二佛髮^一當^レ作^二是觀^一。不^レ得^二他觀^一。若他觀者名爲^二邪觀^一。名爲^二狂亂^一。名爲^二失心^一。名爲^二邪見^一。名^二顛倒心^一。

と述べ、あるいは髮際の相の最後には、

是名^レ觀^二佛髮際^一。如^レ此觀者名爲^二正觀^一。若異觀者名爲^二邪觀^一。佛告^二父王^一此名^二如來髮際實觀^一。

とある。このような句はこれまで見てきたように、その觀全体を指すものである。この觀の正邪を説く定形化された句は、この經の中で五十回ちかく見られる。これとは逆に、これら正觀を説く切り出し部分で述べられる「佛告^二父王^一。云何名^レ觀^二如來頂^一」や「云何觀^二如來額廣平正相^一」などは明らかな対象を持つが、問題提起であるから、この「觀」の語も觀仏の具體的な場面でのものではない。

また、如來方頬車相の中では、

繫念思惟作^二是觀^一者。除^二滅百劫生死之罪^一。

と述べられる。このような除罪を説く文章が、劫数などは異なるが經全体を通してよく見られる。この場合の「觀」も行法全体を指すもので、正觀・邪觀の部分と同等のものと言えよう。さらに、序觀地品の三十二相八十種隨形好を列ねる中に見られる以下のパターンの「觀」の語も觀全体を表すものである。

或有^下欲^三繫^レ心觀^二於佛頂上^一者^上。或有^下欲^三繫^レ心觀^二佛毛髮^一者^上。或有^下欲^三繫^レ心觀^二佛髮際^一者^上。

このようなパターンは、この序觀地品だけでも数十箇所にも及ぶ。

以上のような觀相全体を指す「觀」を除くと、この經に見られる「觀」の数は激減する。一見、「觀」の語が頻繁に使用されているようであるが、觀相を説明する具体的な場面での「觀」の使用はけっして多いとは言えない。

それに対し、觀相の説明中によく用いられるのが「見」の語である。たとえば、「佛告父王。云何名觀如來頂。」の説明の中では、

如來頂骨團圓猶如^二合捲^一。其色正白。若見^二薄皮^一則爲^二紅色^一。或見^二厚皮^一則金剛色。

と述べられているように、見られるもの、見るべきものとして説かれる。このような例は多く、あるべき結果から見た視点で説明されるのである。

ちなみに、序觀地品中に、

若有^二衆生欲^レ念^レ佛者。欲^レ觀^レ佛者。欲^レ見^レ佛者。……

(中略)……欲^レ知^下如來伏^二曠野鬼神^一毛孔光明相^上者^甲。

とあるように、「念仏」「觀仏」「見仏」と分別されて説かれているものの、その差異については明確な規定がない。つまり、

仏をおもうという主観的な面から見れば「念仏」であり、それを客観的にアプローチすれば「観仏」となり、目的・結果から捉えたと「見仏」になると言えるかもしれない。しかし、それぞれは、個別なものとはけっして言えないが、反面同じものであるとも言えない。

執二明鏡一示語二罪人一言。汝心多著可レ観二此鏡一。觀二此鏡一時。見三於鏡中有二利劍像一。即作二是念一。我今體羸不レ堪二欲事一。⁽⁵⁶⁾

この例のように、鏡をよくよくながめ見る（観）と、そこにあらわれた利劍の像を見て（見）、ある思いをおこした（念）とあり、明確に区別されている。ところが、仏を対象とした時、

・念佛三昧者。見二佛色身一了了分明。亦見二佛心一切境界一。⁽⁵⁶⁾

・得二此觀一者。名二佛現前三昧一。亦名二念佛三昧一。亦名二觀佛色身三昧一。爾時諸佛異口同音。各各皆爲二行者一說法。雖未レ得レ道。見レ佛聞レ法總持不レ失。此名二凡夫念佛三昧一。⁽⁵⁷⁾

・汝行二觀佛三昧一。得レ念二佛心一故我來證レ汝。⁽⁵⁸⁾

などのように区別が難しくなる。この経は観相品を中心とした前半の観仏から次第して、観像品を通して念仏を説く念七仏品、念十方仏品の後半へと展開されるが、巻九の本行品以下では五逆罪など重罪の者に対する意識が強くなる。とくに観像は未来

世の重罪の人のために説かれたものであり、ここで念仏三昧が示されるので、念仏三昧は後世の凡夫を意識したものといえる。それは念十方仏品の中で、

佛滅度後佛諸弟子。欲レ觀二十方佛一者。於二念佛三昧中一但知二麁相一。當三自然知二無量妙相一。⁽⁵⁹⁾

とあるように、念仏三昧ではまず麁相を知ると言われていることから、凡夫を意識した行法であることが窺える。そういう点から、この経を次のように名付ける。

佛告二阿難一。此經名二繫想不動一。如レ是受持。亦名レ觀二

佛白毫相一。如レ是受持。亦名三逆順觀二如來身分一。亦名二

一一毛孔分別如來身分一。亦名レ觀三三十二相八十隨形好諸

智慧光明一。亦名二觀佛三昧海一。亦名二念佛三昧門一。⁽⁶⁰⁾

つまり、この経は観仏三昧海の経であると同時に、念仏三昧門の経でもある。そして、この観相の中心が白毫相であることも推し測られるのである。

さて、この経名をあげる中で最初に述べられている「繫想不動」は、最初に説かれるだけあって、この経にとって重要な内容であると考えられる。今その詳しい内容には触れないが、この想を繋いでいくことが、観仏や念仏の根底にあると言えよう。先述した除罪の個所で「繫念思惟作是觀者」とあり、瑞相を説く中でもしばしば「繫心觀……」とあったように、「繫想」の

他、「繫念」⁽⁶²⁾や「繫心」、あるいは「係念」「専念」などもその部類に入るものであろうが、これらの語句はこの経の中で、しばしば述べられているものである。観仏はこのような想の持続によって実現されるものであることが理解される。

ちなみに、ここにも見られる「想」の語であるが、この経では観像品の中で多用され、他の品ではあまり使われない。この観像品は先述の通り、仏滅後の悪衆生のために説かれたもので、具体的な仏像を通しての観相である。

佛告「阿難」。佛滅度後現前無レ佛當レ觀「佛像」。觀「佛像」者。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷天龍八部一切衆生欲レ觀像者。先入「佛塔」以「好香泥及諸瓦土」塗「地」令「淨」……（中略）……五體投地泣「淚像前」。從「地」而起齊整「衣服」結加趺坐。繫「念」一處「隨」前衆生。繫「心」鼻端。繫「心」額上。繫「心」足指。如「是」種種隨「意」繫念專置「一處」。勿下令「馳散」使「心」動搖。心若動搖舉「舌」拄「腭」。閉「口」閉「目」叉手端坐。一日至七日令「身」安隱。見「安隱」已然後想「像」⁽⁶³⁾。

これは、「想像」までの準備を述べたものであるが、仏塔に入り身辺を整えて懺悔し、精神を集中させなければならないとしている。この中、最初に「欲観像者」と観像の語を使っているが、文の最後では「想像」とする。それならば、「観像」の

中に「想像」の行法が入っていると捉えることもできるが、果たしてそうなのであろうか。この「想像」以下に述べられる行法は、まず逆観と順観を説き、その中では「観」あるいは「見」の語を用いて観相を述べている。この仏像の逆観と順観を十四回終えた後、一像がはっきりと観じることができ、禪定に入っても入らなくても常に立像が行者の前にあらわれて見ることができるといふ。そして、

見「一」了了復想「三像」。見「二像」已次想「三像」。乃至想「十皆令」了了。見「三十像」已想下一室内滿「中」佛像間無「中空」⁽⁶⁴⁾。
缺上。

とあるように、その仏像の数が次第に増え、室内を満たすとするが、ここで「想」の語が使われる。観像品ではこれ以降、「想」の語を多く用いる。そして、この「想」の語を使う場合、ここに示したように、実際の仏像から離れて、宗教的境地の中で心に顕現してくる仏像なのである。たとえば、

開「目」閉「目」皆令「心」想。想想不「絶」心心相續。如「渴思」飲。此想成已見「一」由旬滿「中」佛像」⁽⁶⁵⁾。

とあり、また「観仏坐」を説く中では、

觀「佛」坐。至心繫念令「三」前立像足下生「華」。此華生時當「起」二想念。令「下」此大地作「三」黄金色「作」中七寶色上。隨「想」而現。一一寶色黄金爲「界」。一一界間生「三」寶蓮華。作「三」此

想一時有_二寶蓮華_一千葉具足。應_レ想而現。既見_レ花已請_二諸
想像_一令_レ坐_二寶華_一。⁽⁶⁶⁾

と述べられているように、「想」によって現出されるものなのである。後者の引用例のように、仏像の坐している相を観じることが、「想」によって実現されてくるのである。この観像品では、「観立像」や「観像坐」、「観像行」などが説かれるが、これらは実物の仏像から導き出された想いの中での仏像なのである。つまり、これらの観は、「想像」の中で成就されるのであり、「観」は「想」によって世界がふくらみ、自由な世界を有することになる。そして、「観像行」のように像が動くまでになる。ちなみに、この観像品にも「繫念」や「繫心」がしばしば用いられているように、対象から心を離さないことが重要な要素となる。

ところで、このような仏塔に入って観像する場面での「想像」は、この観像品に限ったことではない。たとえば、

若坐_レ不見當_二入_レ塔觀_一。入_レ塔觀時。亦當_レ作_二此諸光明
想_一。⁽⁶⁷⁾

とあり、

若不_レ見者。如_レ前入_レ塔諦觀_二像耳_一。一日至十四日。亦
得_下如_二向所説_一功德上。是故智者當_レ勤_二修集正觀_一佛耳_一。
勿_レ使_二廢失_一。若病苦時倚側偃臥。亦當_レ觀_二佛清淨耳相_一。

如是觀_二像耳_一。如_レ前所_レ想心不_二懈退_一。⁽⁶⁸⁾
とある。また、

觀_二佛影_一者先觀_二佛像_一作_二丈六想_一。結加趺坐敷_レ草爲_レ座。
請_レ像令_レ坐見_レ坐了。復當_レ作_レ想。作_二石窟高一丈八
尺深二十四步清白石想_一。此想成已見_下坐佛像住_二虛空中_一
足下雨_下花_上。⁽⁶⁹⁾

というように述べられている。このような例のように、「観像」は「想」を伴う場合が多い。つまり、観仏を実現していく一手段として想像があると言えよう。「想像」以外の「想」の使用例としては、「帝釈想」や「梵天想」などの想名や、「心想」や「欲想」などの心の作用そのものを指す場合にも使われる。その中、「観」と並列に扱われている場合がある。観相品の中で、十方を光明が照らすことを説く個所で、その方角の説明の最後にしばしば次のような表現が見られる。

佛滅度後佛諸弟子。想_二是法_一者。思_二惟是法_一者。觀_二是
法_一者。當_レ知此人常見_二諸佛速成_二大乘_一。除_二却十億劫生
死之罪_一。⁽⁷⁰⁾

これは西北方でのもので、各方多少異なるが、基本部分は同じと言ってよい。ここでは「観」と「想」と「思惟」が並列して述べられ、これによって「見仏」が実現するという。他の方角では「持是法者」や「憶想是者」、「聞是法者」⁽⁷¹⁾のようなもの

もあるので、これらも同じレベルのものと考えられる。しかし、「聞是法者」とあるので、これらはすべて同義のものとは解釈できない。他のものが心に関係した面が強いのに対し、聞くことは少し意味が異なるので、これらすべては別のものと考えなくてはならない。

以上、『観仏三昧海經』について考察してきた。全十卷あるため言い尽くせなかったが、この經における「観」は、他の經と同様行法全体を表わす場合が多く、しかもその説明においては「見」の語が多用される。さらに、「想」の語は、「想像」において多く用いられており、他の個所でも「観」と混同されて用いられてはいない。

『観無量寿經』一卷

それでは、『観無量寿經』の場合はどうかであろうか。この經も他の經と同様、観相の行法自体の中で動的な「観」として用いる場合は少ない。たとえば初観の中に、

當下起「想念」。正坐西向諦觀⁽⁷²⁾中於日上。

とあり、第七観では、

作「此想」時不^レ得^二雜觀^一。皆應^二一^レ觀^レ之^一。一一葉。一珠。一一光。一一臺。一一幢皆令⁽⁷³⁾三分明^一。

とある。さらに、第八観では、
見^二如^レ此事^一極令^二明了^レ如^レ觀^二掌中^一。⁽⁷⁴⁾
と述べられる中に用いられている。そのような中で、比較的多く使われているのは、第九観と第十観である。

若有^下欲^レ觀^二觀世音菩薩^一者^上。當下先觀^二頂上肉髻^一。次觀^二天冠^一。其餘衆相亦次第觀^レ之。悉令^二明了^レ如^レ觀^二掌中^一。⁽⁷⁵⁾
中^一。作^二是觀^一者名爲^二正觀^一。若他觀者名爲^二邪觀^一。⁽⁷⁶⁾

これは、観音菩薩の観相を述べた第十観のものである。この中、「観觀世音菩薩」の「観」は、行法全体を指すもので、正観や邪観の定形句に見られる「是観」と同一のものである。ここでは観相の次第が語られるが、このような観相の具体的な説明の中で、「観」が使用されているのはごく僅かである。また、第九観の中では、

作^二此觀^一者。捨^二身他世^一生^二諸佛前^一。得^二無生忍^一。是故智者應^二當繫^レ心諦^二觀無量壽佛^一。觀^二無量壽佛^一者。從^二一相好^一入。但觀^二眉間白毫^一極令^二明了^一。⁽⁷⁶⁾

とある。無量寿仏の一相から入って眉間の白毫相を観じることを読く中で、「観」の語が使われる。こちらも観相の説明の中で説かれるものである。これに対して、先述した正観や邪観、あるいは「是観」や「第〇観」などとして使われるが、いずれも行法全体を指す。

それでは、『観仏三昧海經』で頻繁に使われていた「見」はどうであろうか。『観仏三昧海經』ほど多用されることはないが、それでも全体を通じて使用されている。これも他の經と同様の使われ方で、観相の結果として、あるいは仏の力や瑞相として顕現されたもの、されるべきものを見ることである。

これらに対し、この經の中で注目しなければならないのは、やはり「想」の語であろう。周知の通り、この經にはそれぞれの觀に觀名が付けられているが、それとは別に想名が付されており、この經の一つの特徴になっている。以下、その想名をあげると、

- ①日想 ②水想 ③地想 ④樹想 ⑤八功德水想 ⑥總觀想
⑦花座想 ⑧像想 ⑨遍觀一切色身想 ⑩觀觀世音菩薩真実色身想 ⑪觀大勢至色身想 ⑫普觀想 ⑬總想觀
⑭上輩生想 ⑮中輩生想 ⑯下輩生想

この中、想名の個所でのみ「想」の語が使われるのは、⑩⑪⑭⑮⑯の五觀であるが、⑭⑮⑯は三輩を説く個所であつて、便宜上付けられたものであろう。今この三つを除けば、十三觀中十一の觀で「想」の語が何らかのかたちで使われている。その中でもとくに多用されるのは、像想の第八觀である。この第八觀は、「觀」というキーワードで見ると、この經の中で重要な意味を持つ觀であることが窺われる。この觀は最初に「想像」

ではなく、「想仏」について解説する。

次當^レ想^レ佛。所以者何。諸佛如來是法界身。遍入^二一切衆生心想中^一。是故汝等心想^レ佛時。是心卽是三十二相八十隨形好。是心作^レ佛是心是佛。諸佛正遍知海從^二心想^一生。

是故應^レ當一心繫念諦觀^二彼佛多陀阿伽度阿羅呵三藐三佛陀^一。想^二彼佛^一者。先當^レ想^レ像⁽¹⁷⁾。

ここで注意しなければならないのが、「觀仏」ではなく「想仏」とされていることである。このような「想仏」の思想は、他の五經にはあまり見出せない。何故あえて「想仏」なのか。それは、この一つ前の第七觀の導入部分に戻らなければならぬ。第七觀では、第六觀までにはなかった部分が付加されている。第六觀までは順次觀相を説くが、ここに來て、あらためて仏が韋提希に無量寿仏と觀音、勢至の兩菩薩を見させている。これを見た韋提希は、未來の衆生がこれらの仏・菩薩を觀じるべき方法を世尊に質問している。そこで世尊は、

佛告^二韋提希^一。欲^レ觀^二彼佛^一者。當^レ起^二想念^一。⁽¹⁸⁾

と述べ、觀仏には「想念」が必要であると説く。ここで、あえて韋提希に三尊を見させたのは、これから述べる本論への導引であらう。第六觀までは、報土についての觀相であつたが、この觀からは阿弥陀仏の觀相に一層近づいていく。したがって、「作此想時不得雜觀。皆應^二一觀之^一。一一葉。一一珠。一一光。

一一臺。一一幢」とあえていわれるのは、想念の徹底のためであることが推し測られる。いずれにしても、「観仏」の前提を「想」に委ねている。

それでは、何故「想」を用いる必要があるのか。これについては、第九観を見なければならぬ。阿弥陀仏そのものを観じる第九観の中には、

無量壽佛有二八萬四千相。一一相中。各有二八萬四千隨形好。一一好中復有二八萬四千光明。一一光明遍照二十方世界。念佛衆生攝取不捨。其光相好及與二化佛。不可具説。但當憶想令二心明見。見此事者。即見十方一切諸佛。

とある。八万四千の随形好から出される光と化仏を見ることが見仏につながるのであるが、それらの光と化仏は説くことができないという。詳説されないものを観じることは容易なことではない。観相は、ある程度は経などに示された相をもとにしてイメージをふくらめますが、それがなければ想像力を豊かにして見ていくことが要求される。したがって行者は、「憶想」して心の眼でこれらの光と化仏を見るべきだとする。見仏には、憶想が重要なものであることが分かる。

しかし、豊かな憶想は一朝一夕に養われるものではない。序分のなかで世尊が、

汝是凡夫心想羸劣。未得天眼不能遠觀。

と説くように、凡夫は心のはたらきが劣っているので遠くの見えないものを観じることができない。観じることができないはずの凡夫が、それでも阿弥陀仏と極樂世界を見たいのならば、以下のようにせよと言って十六観を説き出すのであるが、その最初に、

佛告三輩提希。汝及衆生。應下當專心。繫一念一處。想中於西方上。

と説いている。「専心」「繫念」し西方を「想」うことがその方法であるという。心想が劣っていても、これしか方法がないのならば、この「想」うことを磨いていくことが必要不可欠になる。「観仏三昧海経」の名前を説く中で、「繫想不動」を最初にあげていたのも頷くことができる。したがって、各観に「想」の面を強調することにより、凡夫の劣っている面を増強しようという思索があったのではないかと考えられる。

そこで、まず「想」をなす方法の第一歩として、初観で日想を説く。

當下起二想念。正坐西向諦觀二於日。令中心堅住。專想不移。

このような日想は、現実に見られる太陽を観じているので、「想」の仕方を教える基本的な練習の面を有しているものと考え

えられる。そして、この「想」の積み重ねによって、第九観に述べられるところの「憶想」が実現されると思われる。したがって、第八観に「想仏」を説くのは、観仏や見仏の実現には、「想仏」が必要だからである。と言うよりは、「想仏」は観仏や見仏と別に考えられるものではない。そういう意味では、「想仏」は、この経の説くところの中心とも考えられる。「想仏」の説明の中に、「汝等心想佛時。是心即是三十二相八十隨形好。是心作佛。是心是佛諸佛。」とあつたように、この「是心」とは「想仏」する心であり、「想仏」する心は仏に他ならない。このように言い切る背景には、この経の「想」に対する強い確信があることが窺われる。

さて、この「想仏」をなそうとすれば、まず「想像」を行えと第八観では説く。日想と同様、現実に見ることが出来る仏像を用いたものである。日想が初心者の「想」への導きと同時に報土への導入であるとすれば、像想は阿弥陀三尊の観相への導入であり、練習であるといえよう。まず、

閉_レ目開_レ目見_下一寶像如_二閻浮檀金色_一坐_中彼華上_上。像既坐已。心眼得_レ開_了了分明⁽⁸³⁾。

と述べ、目の開閉に関わらず像の坐しているのを明らかに見よという。それに続けて極樂国土を見ることが説かれ、さらに二菩薩について説かれる。

『觀無量壽經』における「觀」の語

復作_二大蓮華_一在_二佛右邊_一。想_三一觀世音菩薩像坐_二左華座_一。亦放_二金光_一如_レ前無_レ異。想_三一大勢至菩薩像坐_二右華座_一。此想成時。佛菩薩像皆放_二妙光_一。其光金色照_二諸寶樹_一。一一樹下亦有_二三蓮華_一。諸蓮華上各有_二一佛_一二菩薩像_一。遍_二滿彼國_一。

細かく具体的な相の説明なしに像を想うというのは、その字の如く想像力の豊かさに委ねられるが、そこには第七観までの観相の宗教的体験があるといえよう。

このような想像は、第十三観の雜想觀の中でも述べられる。

若欲_三至心生_二西方_一者。先當_レ觀_三於一丈六像在_二池水上_一。如_二三先所_一說。無量壽佛身量無邊。非_二是凡夫心力所_一及。然彼如來宿願力故。有_二憶想_一者必得_二成就_一。但想_二佛像_一得_二無量福_一。況復觀_二佛具足身相_一。

往生極樂のためには、一丈六尺の仏像を観じるべきだとする。そして、それは憶想によって成就されると説く。このあたりの経過は先述した「想仏」「想像」を中心に考察したところと一致する。さらに、仏像を想うだけでも功德があるのに、観仏はなおさらであると説く。

また、第十二観では第十一観までの観相を受けて、西方極樂の蓮華の中に生れるのを想えという。

於_二蓮華中_一結跏趺坐。作_二蓮華合想_一。作_二蓮華開想_一。蓮

華開時。有二百五十色光⁽⁸⁶⁾來照レ身想。眼目開想。見三佛菩薩
滿「虚空」中⁽⁸⁶⁾。

自らが西方に生れるその姿（像）を想うのである。最終的にあるべき姿を想像する宗教的体験を通して、その信を確固たるものにしようとするねらいがあるものと思われる。ここまで行ってきた極樂や阿弥陀三尊への観相の後で、自らがその極樂に 있는ことを想うのは、それは感動的なものであろう。「観」は集中していく方向に働くが、「想」は拡大していく方向性を持つ。ここで「観」でなく「想」を使うことにより、そのイメージをふくらませる効果を發揮しているといえよう。

以上、『観無量寿経』について見てきたが、「観」の語は他の五つの観経と同じように行法全体を指す場合が多く、観相の具体的な内容を説く中ではあまり使用されない。それに対し、「観想」などと並べて使われ、「観」と使い方が曖昧であった「想」の語は、この経を特色付ける語である。この経における観の内容は、「想」の語をはずして語られるものではない。観仏を実現するためには、「想仏・想像」を中心とした「想」の行いが必要であるといえよう。「観」の語と「想」の語は、明確な区分を持つものではないが、それらの意味している内容の方向性は、その使われ方によって知ることができる。⁽⁸⁷⁾ 観じるこ

の回復しかない。そのためには、一から想を組み立て、専心繫念することであった。つまり「想」によって「観」が達成されていくのである。そのような視点から見ると、「観」は「想」によって本来の価値を保っているといえよう。

なお、この経においても一つの重要な語である「念」については、別の機会に明らかにしたい。「念」や「憶」、さらには「想」も含めて「おもう」と訓読できる諸語は、この経中で重要な意味をもつからである。また、今回は諸師の解釈は敢えて入れなかった。この点も検討していきたい。

〔註〕

- (1) 『観無量寿経』の研究の現状については、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経 般舟三昧経』（浄土仏教の思想第二巻、講談社、一九九二）の中で、末木文美士氏がまとめておられる。また、『観無量寿経』の観については、白井元成「経題のこころ——『観無量寿経』の観について——」（『親鸞教学』八、一九六六）がある。
- (2) 大正蔵一三・六七七中
- (3) 大正蔵一三・六七七下
- (4) 大正蔵一三・六七七中下
- (5) 大正蔵一三・六七七下
- (6) 大正蔵一三・六七七下
- (7) 大正蔵一三・六七七中
- (8) 大正蔵一四・四一九下
- (9) 大正蔵一四・四一九下

- (10) 大正蔵一四・四二〇下
 (11) 大正蔵一四・四二〇中
 (12) 大正蔵一四・四二〇上
 (13) 大正蔵一四・四二〇中
 (14) 大正蔵一四・四二〇上
 (15) 大正蔵一四・四二〇中
 (16) 大正蔵二〇・六六三上
 (17) 大正蔵二〇・六六五中
 (18) 大正蔵二〇・六六六上
 (19) 大正蔵二〇・六六六中
 (20) 大正蔵二〇・六六三上
 (21) 大正蔵二〇・六六三中
 (22) 大正蔵二〇・六六四下
 (23) 大正蔵二〇・六六五下
 (24) 大正蔵二〇・六六六上
 (25) 大正蔵二〇・六六二下
 (26) 大正蔵二〇・六六一上
 (27) 大正蔵二〇・六六二中
 (28) 大正蔵二〇・六六二下
 (29) 大正蔵二〇・六六二下
 (30) 大正蔵二〇・六六三上
 (31) 大正蔵二〇・六六四中
 (32) 大正蔵二〇・六六三下
 (33) 大正蔵九・三九二中
 (34) 大正蔵九・三九二下
 (35) 大正蔵九・三九二下
 (36) 大正蔵九・三八九下

『觀無量壽經』における「觀」の語

- (37) 大正蔵九・三九〇中
 (38) 大正蔵九・三九三中
 (39) 大正蔵九・三九三下
 (40) 大正蔵九・三九二下
 (41) 大正蔵九・三九二上
 (42) 大正蔵九・三九一上
 (43) 大正蔵九・三九二下
 (44) 大正蔵九・三九一中
 (45) 大正蔵九・三九一下
 (46) 大正蔵一五・六四九中
 (47) 大正蔵一五・六四九中
 (48) 大正蔵一五・六四八下
 (49) 大正蔵一五・六四九中
 (50) 大正蔵一五・六五六下
 (51) 大正蔵一五・六四八上
 (52) 大正蔵一五・六四八下
 (53) 大正蔵一五・六四七中
 (54) 本経では、「若稱名者。除二百千劫煩惱重障」。何況正心修念佛法定。」「(大正蔵一五・六八七中)とあり、称名と念仏はまったく別のものとし、念仏が優れているとする。
 (55) 大正蔵一五・六七二中
 (56) 大正蔵一五・六九二下
 (57) 大正蔵一五・六九二下
 (58) 大正蔵一五・六九三上
 (59) 觀像品の中に、「如來今者爲未來世五苦衆生。犯禁比丘不善惡人。五逆誹謗。行二十六種惡律儀一者上。爲二如是等一說二除罪法二」。(大正蔵一五・六九〇中)とある。

- (60) 大正蔵一五・六九四下
- (61) 大正蔵一五・六九六中
- (62) 繫念は、三十二相八十種隨形好を説く中で「云何名『繫念』。」
 (大正蔵一五・六四七下)とあり、その説明として仏の相を觀じる
 ことを説く。つまり、繫念とは觀相に他ならない。また、「龜心觀_レ
 像尚得_二如是無量功德_一。況復繫念觀_二佛眉間白毫相光_一。」(大正
 蔵一五・六九一中)とあり、繫念を重視する。
- (63) 大正蔵一五・六九〇下
- (64) 大正蔵一五・六九一上
- (65) 大正蔵一五・六九一上
- (66) 大正蔵一五・六九一下
- (67) 大正蔵一五・六五六上、中
- (68) 大正蔵一五・六五六中
- (69) 大正蔵一五・六八一中
- (70) 大正蔵一五・六六七下
- (71) 「持是法者」 大正蔵一五・六六六中
 大正蔵一五・六六七中
- 「憶想是者」 大正蔵一五・六六六下
 大正蔵一五・六六七中
- 「聞是法者」 大正蔵一五・六六六下
- (72) 大正蔵一二・三四二上
- (73) 大正蔵一二・三四三上
- (74) 大正蔵一二・三四三上
- (75) 大正蔵一二・三四四上
- (76) 大正蔵一二・三四三下
- (77) 大正蔵一二・三四三上
- (78) 大正蔵一二・三四二下
- (79) 大正蔵一二・三四三中
- (80) 大正蔵一二・三四二下
- (81) 大正蔵一二・三四二下
- (82) 大正蔵一二・三四二上
- (83) 大正蔵一二・三四三上
- (84) 大正蔵一二・三四三中
- (85) 大正蔵一二・三四四中
- (86) 大正蔵一二・三四四中
- (87) 「想」の語を安易に「觀想」とすることに注意をはらう必要があ
 ろう。「想」は像にかかる面が強く、觀相においては、「觀想」より
 「想像する」というニュアンスのほうが似つかわしい場合が多いよ
 うに考えられる。
- (88) 『觀無量壽經』の念仏について最近の研究に、能仁正顯『觀無量
 壽經』の念仏三昧とその背景(『印度學仏敎學研究』四二―二、一
 九九三) あがり、想仏なども含めて検討されている。